

P2-016

久留米市における虐待ハイリスク妊産婦の要因分析と支援体制の構築

成沢 優子¹⁾、深町 純平²⁾、清水 知子¹⁾、酒井 陽一²⁾

久留米市子ども未来部 こども子育てサポートセンター¹⁾、
久留米市子ども未来部 家庭子ども相談課²⁾

【目的】 継続的な支援を必要とするハイリスク妊産婦の効率のかつ適切な把握に努め、虐待予防に向けた妊娠期からの支援体制の充実及び安心して出産・育児ができる地域づくりに繋げることを目的とする。

【方法】 こども子育てサポートセンターを設置した平成 29 年 10 月から平成 31 年 3 月までの 1 年半に対応したハイリスク妊産婦延べ 827 件を対象としてリスク要因等を分析し、課題の明確化と今後必要な支援体制について検討する。

【結果】 ハイリスク妊産婦を把握したルートは妊娠届時の保健師によるアセスメントが 487 件 (58.9%) と最も多かった。次いで医療機関からの支援依頼が 219 件 (26.5%) であり、その多くは産科であった。心身の健康や社会・経済的要因など全 33 項目に分類したリスク数は延べ 2162 件に上り、1 人あたり平均 2.6 件の要因を抱えていた。最も多かったのは「精神疾患 (既往含む)」225 件 (10.4%)、次に「訴え・不安が強い」224 件 (10.4%) であり精神面に関連する要因が上位を占めた。また、精神疾患の診断名の約 3 割が気分障害であった。保健師介入時点で 89 件 (39.6%) が治療中であり、うち 63 件 (70.8%) は内服中であった。分析の結果、リスク要因の中でも妊産婦の精神的リスクに対する支援強化の必要性が大きく示唆された。そのため、保健師が用いる面談時マニュアルの内容を見直し充実させ、また精神保健担当部局と協議しその連携方法や役割分担を明確にした。さらに、令和元年 10 月から産科・小児科との連携システムに精神科を加え、新たに体制を整備した。

【考察】 精神疾患や育児不安を有する妊産婦は虐待のリスクが高まると言われている。そのような中、当市では妊娠届の面談時マニュアルを作成し、保健師の聞き取りと対応の標準化を図っている。また、平成 23 年度から産科・小児科医療機関と連携し、相互に連絡票を用いてハイリスク妊産婦の早期把握・支援を行ってきた。今回の体制整備により、妊産婦の支援方針に関する情報を精神科医療機関と共有でき、疾患の特徴や重症度に応じた適切な支援が可能になったと考える。これは妊産婦の精神的リスクを低下させるだけでなく、同時に保健師の支援困難感も軽減させるものである。今後は、事例の集積と症例検討を通して 3 科医療機関との連携に努めることで、妊産婦が安心して出産・育児ができるよう効果的な取り組みをさらに発展させていく必要があると考える。

P2-017

歯科専門病院における子ども虐待対応チームとオンライン対応

宮新 美智世

東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 小児歯科学・障害者歯科学分野

【緒言】 診療や健診を通し子育て家庭と接点のある医療機関は、子ども虐待の早期発見、予防において迅速な対応が期待される。救急医療を担う東京医科歯科大学医学部ならびに歯学部附属病院 (以下それぞれ医病, 歯病) は虐待防止委員会 (Child Abuse Prevention System ; CAPS) を構成し、その傘下で歯病子ども安全対応チーム (Child Protection Team ; CPT) が活動している。この活動の展開方向を明らかにすることを目的として、歯病小児歯科による子ども虐待防止の取り組みを検討したので報告する。

【活動内容の紹介】 歯病スタッフの子ども虐待を疑った場合の対応は、小児や保護者の様子を「子ども安全チェックリスト」に記入し CPT に提出し、CPT 構成員は対応を検討の上、虐待を疑った場合は作成した「子ども安全対応フローチャート」に従い対応した。その結果、各診療科や業務課と情報共有のもと、院内での指導や保護、児童相談所への通告その他、法医学・法歯学分野、医病 Social Worker との連携を図り、育児不安を抱えた保護者に対しては子どもの育児支援外来や小児歯科外来での治療や定期的指導を継続した。特にう蝕や歯周疾患は罹患率が高いため、歯科医療機関への定期的通院は小児とその家族を医療機関に日常的につなげる糸口になった。そのほか、小児歯科外来では、医療者からの相談への対応、救急救命センターや ICU 等への往診や、保護された児の外傷歯ならびに齲蝕の治療を行った。一方、歯病のスタッフ向けには e-learning 研修のための教材を開発した。

【評価法】 CPT 構成員に活動内容についての評価を自由記載で提出してもらい、これを資料として質的データ分析法 SCAT を用い解析した。

【結果と考察】 SCAT 分析からは、限られたマンパワーの中で速やかできめ細かいサービスを可能にするための、オンライン診療システムへの応用が有用であり、口腔所見などの良質な画像を添えた情報が CPT 内において短時間で送信・共有することが推奨された。迅速な対応が可能になり、安全な多職種連携を病院の内外部で推進できる点においても、オンラインシステム利用のさらなる展開が期待できた。また一般に対する「親子の歯科教室」を活用して子育て情報の発信機会を増やし、健全な口腔づくりを通じた地域とのつながりを広げることで、育児支援を行う意義が再確認できた。